

日本語用論学会 第28回大会 プログラム (一覧表)

大会テーマ：「カオスと秩序」

開催日時：2025年11月30日(土) 10:00 開始

2025年12月1日(日) 9:00 開始

オンラインで参加される方へのアクセスリンクは、11月28日(金)までに、参加費の支払いと参加登録を完了された方に宛てて、メールでお届けする予定です。

【11月29日(土)】

	Room 1 □	Room 2 □	Room 3 □	Room 4 □
	<u>【ワークショップ1】</u> <u>オーガナイザー：</u> <u>菊地 礼</u> <u>(長野工業高等専門学校)</u>	<u>【ワークショップ2】</u> <u>オーガナイザー：</u> <u>笹本 涼子 (奈良女子大学)</u>	<u>【ワークショップ3】</u> <u>オーガナイザー：</u> <u>木下 蒼一郎</u> <u>(慶應義塾大学/日本学術振興会特別研究員 PD)</u>	<u>【ワークショップ4】</u> <u>オーガナイザー：</u> <u>木村 快 (慶應義塾大学[院])</u>
10:00-12:00	引用は何を生み出すのか—語用論的効果の理論と記述を通して— 発表①佐川 寛知 (神戸大学) 引用表現をどう記述するか—公然性と信頼可能性への転回— 発表②貝森 有祐 (流通経済大学)・菊地 礼 (長野工業高等専門学校) 非学術媒体における引用表現の効果—権威と共感に注目して— 発表③山崎 由佳 (京都大学[院]) 知識に基づく期待の喚起—書籍の表紙におけるハッシュタグの効果から— 発表④平川 裕己 (気象大学校) 解消される暗示性 — YouTube 動画における暗示引用の談話分析—	解釈の構築をめぐる語用論的メカニズム — 関連性理論からみた柔軟性と制約 発表①黒川 尚彦 (大阪工業大学) 日本語ラップにおける韻と造語—解釈的類似性と認知効果 発表②後藤 リサ (関西外国語大学) SNS 投稿に見られる疑問発話の語用論的曖昧性—『それ、何の役に立つんですか?』型表現の解釈の揺らぎと応答傾向 発表③笹本 涼子 (奈良女子大学) 類似性から見た名付けと印象 発表④長辻 幸 (公立小松大学) 文末表現「(ん) だし」についての一考察	言語の中の「形あるもの」とそうでないもの：「形式」という概念の再定義に向けて 発表①松田 俊介 (東京大学) 視覚言語における「透明な」発話形式 発表②木下 蒼一郎 (慶應義塾大学/日本学術振興会特別研究員 PD) 音声言語における「聞こえない」発話形式 発表③氏家 啓吾 (東京都立大学[非]) 使用事象の多層性：認知言語学の観点から	Novel Imitates Normal —模倣と創造の言語学— 発表①浜田 啓志 (杏林大学ほか[非]) You're Wrong—No, You Are—英語応答表現に見る逸脱と規範への模倣— 発表②吉川 正人 (群馬大学) God Bless Everyone Whom of Which Deviates from the Standard—新奇関係詞 whom of which の起源を探る— 発表③木村 快 (慶應義塾大学[院]) In Short, "In Long" Is Emerging—英語の談話標識の新奇表現 in long と模倣—

12:00-13:00	昼休み Lunch Break			
	Room 1 □	Room 2 □	Room 3 □	Room 4 □
	司会： 司会補佐：	司会： 司会補佐：	司会： 司会補佐：	司会： 司会補佐：
13:00-13:35	1-①Shuu KASAHARA (Aoyama Gakuin University[GS]) De-gendering The Account of 'Gendered' Pronouns	2-①平川 裕己 (気象大学校) 禁止サインのレトリック： 隠喩が関与する事例の分析	3-①李 鳳梅 (京都大学[院]) 日常会話における気づきによる活動の脱線と復帰—話し手による脱線開始のケースを中心に—	4-①孫 雨欣 (広島大学[院]) 不同意談話における話題管理の比較—日本語母語話者と学習者の配慮を焦点に当てて—
13:40-14:15	1-②Bin ZHANG (Dresden University of Technology)・Xiaoling ZHANG (Beijing Foreign Studies University) German as an L3: Development of Pragmatic Competence in Chinese Students of German Studies —Findings from a Qualitative Pilot Study	2-②有光 奈美 (東洋大学) 広告言語における緩和表現装置とパロディ表現装置：含意と法的境界の語用論的分析	3-②谷 智子 (関西外国語大学)・岸本 聖子 (愛知県立大学) 公共掲示物の行為促進型表現に見るポジショニングの日仏語対照研究	4-②木場 安莉沙 (名古屋文理大学) 「コロナ禍」の語りから見える医療をめぐる問題とアイデンティティの変化
(5分休憩)	ポスター発表 Poster Presentation 会場：			
14:20-15:20	<以下、入れ替えなし> 会場担当： ①Saki ARAKI (Independent) Intercultural Mediation as an Act of Pragmatic Awareness and Learning: Focus on Japanese BELF Users in International Companies ②岩間 由依 (北星学園大学[院])・柳町智治 (北星学園大学) プロ棋士の発話に見られるメトニミーの語用論的機能 —「難しい将棋」といった表現をめぐって— ③泉 大輔 (立教大学) パラエティ番組『水曜日のダウンタウン』の企画名における「文の包摂」—ボックスティッシュ向けられたら特に必要じゃなくてもとりあえず1枚取っちゃう説— ④中谷 博美 (滋賀県立大学) 英語の付加疑問文の語用論的特性に関する一考察 —日本語・中国語・韓国語との比較対照分析から— ⑤直井 瞭 (東京都市大学[学部])・畑 和樹 (東京都市大学) なぜ「まっすぐ」で終わらないのか：運転における『知識』と『認識』の交渉 ⑥清水 京香 (同志社大学[院]) GoVPing 構文が生起する文脈の選好性—力動性を用いた分析の提案— ⑦杉山 郁美 (宇都宮大学[院]) 日本語会話で用いられる代用表現「あれ」についての一考察—話し手のメタ認知的活動と「あれ」使用の関係に着目して— ⑧種市 瑛 (立教大学)・拙冬 紘和 (横浜国立大学) 沈黙の解釈差に見る共通基盤構築と自己中心性の相互作用 ⑨田久保 紗貴 (法政大学[院]) ツンデレキャラは本当にツンデレ表現を使うのか			
(10分休憩)	会員総会・大会発表賞表彰式・基調講演 会場： (Room 1)			
15:30-15:50	会員総会 General Meeting of Members			
15:50-16:05	大会発表賞表彰式 Best Presentation Award Ceremony			
16:15-17:45	基調講演 Plenary Lecture <オンラインによる同時配信有> 司会：／司会補佐：			
	片岡 邦好 (愛知大学) ポエティクスと語用論の接点			
18:00-	懇親会 Reception 会場：			

【11月30日(日)】

	Room 1 □	Room 2 □	Room 3 □	Room 4 □
	司会： 司会補佐：	司会： 司会補佐：	司会： 司会補佐：	司会： 司会補佐：
9:00-9:35	1-①李 曉霜 (京都外国語大学[院]) 様態副詞と動詞の共起に関する研究	2-①白石 暖哉 (京都大学[院])・黒田一平 (龍谷大学・京都ノートルダム女子大学・京都大学[非]) 短冊に書かれた言語表現の解釈における語用論的な影響と制約	3-①岩橋 一樹 (京都先端科学大学) Leave no stone unturned の形式と意味における創造性をめぐって	4-①水島 梨紗 (札幌学院大学)・大澤 真也 (広島修道大学)・大木 七帆 (北海道武蔵女子短期大学)・阪上 辰也 (広島修道大学)・田中 洋也 (北海学園大学)・中西 大輔 (広島修道大学) 語用論的解釈の自動生成とその課題：LLM を用いた相互行為分析の可能性
9:40-10:15	1-②菅谷 友亮 (中京大学) 視線が明らかにする指示詞選択のための語用論的・視空間的文脈	2-②野村 涼 (Stanford University[院]) 過去の事柄に向けられた命令文 “過去命令” について：テンス・アスペクト・否定の観点から	3-②山内 昇 (大同大学) 話題転換標識における which の指示機能に関する考察：聞き手の反応からわかること	4-②永井 有之 (奈良先端科学技術大学院大学) LLM の時空間メタファー認知
	(10 分休憩)			
10:25-11:00	1-③甲斐 さくら (アジア日本語学院[非]) LINE における「聞き手」という役割の変化 一話し手による言い切り形の選択からー	2-③王 一臻 (京都外国語大学[院]) 感情形容詞の副詞用法の研究ー「嬉しく V・楽しく V」を例としてー	3-③瀧澤 純 (宮城学院女子大学) 物語中の発話が皮肉・嫌味、嘘、冗談、本音として理解されるための表情と声の情報	4-③高木 杏実 (北星学園大学[院]) 『言語相対仮説の再検討：外国語効果に基づく検証と考察』
11:05-11:40	1-④山下 悠貴乃 (十文字学園女子大学) 丁寧な依頼表現としての「てほしいです」「ていただきたいです」の使用についてーTeams チャット上のやりとりの事例からー	2-④尹 盛熙 (関西学院大学) 「A ハ B ダ」の使い方一名詞述語文から見た日韓の言語化戦略の違い	3-④森 貞 (福井工業高等専門学校) 付帯状況を表わす“without + 名詞 + 過去分詞”の生起に関する認知言語学的・語用論的研究	4-④四谷 晴子 (法政大学) 日本で働く中国人会社員の規範意識と人間関係一重負荷依頼に対する発話分析からー
11:45-12:20	1-⑤北澤 茉奈 (杉野服飾大学)・高村 遼 (京都精華大学) 「草」の語用論的機能とメディアの影響ーX と LINE における使用の比較ー			
12:20-13:00	昼休み Lunch Break			
12:00-12:50	語用論茶寮 会場：(Room)			
	語用論茶寮 Pragmatics Salon (Lunchtime Talk) 司会：			
	「アイデアの育て方」 登壇者：名塩 征史先生 (広島大学) 工藤 俊先生 (駒沢女子大学)			

	Room 1 □	Room 2 □	Room 3 □	Room 4 □
	司会： 司会補佐：	司会： 司会補佐：	司会： 司会補佐：	司会： 司会補佐：
13:00- 13:35	5-①井上 大輔 (フリー) 日本語における語用論的前提の戦略使用—セールスやセラピーを題材に	6-①数納 風香 (北海道大学[院]) 話し手のフェイス意識から考える「マウンティング」	7-①Christopher LONG (Tohoku Gakuin University) The belief in shared context: a cognitive processing explanation for variation across languages	8-①岡田 純音 (京都大学[院]) 否定のコピュラを用いたメタファー表現とその談話的機能
13:40- 14:15	5-②井出 里咲子 (筑波大学) 離陸前機内アナウンスのユーモアにみる詩的語用論とコミュニケーションの公共性	6-②大塚 生子 (大阪工業大学) 『世界—ブス!』と言われて：非命題的暴言におけるフェイス侵害と感情の構造		8-②轟 雨晨 (北海道大学[院]) 中国語大規模コーパスに基づくコロナメタファーの使用と現実状況変化との関係性分析
(15 分 休憩)	シンポジウム・閉会式 会場： (Room 1)			
	シンポジウム Symposium <オンラインによる同時配信有> 司会：小松原 哲太 (神戸大学)			
14:30- 17:00	「混沌としたデータのなかに意味を見出す」 [第 1 発表] 崎田 智子 (同志社大学) 語りの多層性とカオスの秩序—史実伝承における対話性と認知— [第 2 発表] 高木 智世 (筑波大学) 日常会話の中の『混沌』に見る秩序—日本語言い淀み形式の相互行為的分業体系— [第 3 発表] 細馬 宏通 (早稲田大学) 訪問介護における共同調理—混沌とした台所で共同注意を達成する方法—			
17:00- 17:10	閉会式 Closing Ceremony			

11月29日(土)

【ワークショップ 1】 (10:00~12:00)

会場：Room1 ()

●引用は何を生み出すのかー語用論的効果の理論と記述を通してー オーガナイザー：菊地 礼 (長野工業高等専門学校)

引用研究は文法論から語用論までまたがる現象であり、特に文法論ではこれまでに理論の構築、現象の記述ともに豊かな成果を持つ (藤田 2000 など)。一方で、一部の先駆的な業績 (Macaulay 1987; メイナード 2008 など) を除き、引用の語用論的側面である効果は未解明の部分が多い。

ここで求められるのは、日本語の実際の文章や談話において、引用がどのような効果を有しているか、事例分析の蓄積と効果を捉えるために適切な枠組みの模索であろう。本ワークショップでは、まず、引用研究の理論的な見地から引用の効果を捉えるための枠組み・理論・概念を提示する (第1発表)。そして、自己啓発書 (第2発表) やハッシュタグ (第3発表) といった近年のメディアを対象として引用の修辭的効果の広がりを見る。さらに、暗示引用 (第4発表) というこれまで直接引用 (DQ) を主な対象とした研究では顧みられなかった現象を掘り下げていく。

参考文献：(1) 泉子・K・メイナード. 2008. 『マルチジャンル談話論』東京：くろしお出版. (2) 藤田保幸. 2000. 『国語引用構文の研究』大阪：和泉書院. (3) Macaulay, R. K. S. 1987. "Polyphonic monologues: Quoted direct speech in oral narratives." *IPRA Papers in Pragmatics*, 1(2), 1-34.

研究発表① 引用表現をどう記述するかー公然性と信頼可能性への転回ー

佐川 寛知 (神戸大学)

従来の引用表現研究では、話し手の意図を基盤に機能・効果を記述してきた (鎌田 2000; 藤田 2000; メイナード 2004)。例えば、下記の例を意図基盤的に記述するなら、「話し手が面白さを狙って太郎の言葉を引用した」といった記述となる。

(1) 花子：太郎が「昨日、出勤中にスズメに襲われかけた」って言った。

確かに、意図は「行為の実際の原因」 (古田 2013: 132) になり得るが、当人による事後的な説明に依存し、外部から把握しがたい。また、引用表現は内容の真偽判定が困難で、鉤括弧内部の元発話の有無も即時には検証できず、聞き手はそれを一旦棚上げして受け入れるしかない。

そこで本発表では、引用表現の記述には、談話空間における「公然性」と、引用者 (の知識状態) に対する「信頼可能性」を軸とすべきことを論じ、引用表現の種々の効果が情報源の帰属関係の操作によって生じることを示す。

参考文献：(1) 鎌田修. 2000. 『日本語の引用』東京：ひつじ書房. (2) 泉子・K・メイナード. 2004. 『談話言語学』東京：くろしお出版. (3) 藤田保幸. 2000. 『国語引用構文の研究』大阪：和泉書院. (4) 古田徹也. 2013. 『それは私がしたことなのかー行為の哲学入門ー』東京：新曜社.

研究発表② 非学術媒体における引用表現の効果ー権威と共感に注目してー

貝森 有祐 (流通経済大学)・菊地 礼 (長野工業高等専門学校)

本発表では、自己啓発書とネット記事の引用を比較し、その効果を明らかにする。学術論文と一般向け媒体における引用の違いについては議論があるが (Hyland 2018; 菊地・貝森 2025)、一般向け媒体における引用の用いられ方の違いやその効果については十分に検討されていない。

学術論文の引用が情報源の特定と遡及を主目的とするのに対し、自己啓発書やネット記事には以下のように情報源の特定が困難な引用が観察される。

(2) デューク大学などの研究によれば、この3ステップを踏むだけで、あなたの合理脳は確実に働き始めます。(メンタリスト DaiGo『突破力』)

(3) ちなみに利恵さん独自の統計によると「男性よりも女性のほうがタメ口に厳しい気がする」とのこと。 (独女通信)

本発表は、こうした引用が正確な情報源の明示よりも、説得性や信頼性の演出を優先し、権威の借用や身近な声の提示を通じて読み手に働きかける役割を果たすことを示す。

参考文献：(1) Hyland, Ken. 2018. *Metadiscourse: Exploring Interaction in Writing, reissued edition*. London: Bloomsbury. (2) 菊地礼・貝森有祐. 2025. 「自己啓発書における出典を示さない引用について：引用の効果に着目して」『文体論研究』 71: 1-16.

研究発表③ 知識に基づく期待の喚起—書籍の表紙におけるハッシュタグの効果から—

山崎 由佳 (京都大学[院])

本発表では、オフラインでのハッシュタグの効果を分析する。SNS 上で誕生した当該表現はインターネット外にも浸透し、その使用には、強調 (Caleffi 2015)、オンラインへ導く (Androutsopoulos 2024) といった効果が指摘されているが、本発表では書籍を対象として他の効果を論じる。

具体的には、タイトルにハッシュ記号「#」を含む書籍数百冊について、その表紙・カバーの視覚的要素 (例：既存 SNS のデザインの模倣) と言語的要素 (例：SNS 関係の言葉の含有、既存のタグの使用) といった特徴を抽出し、書籍の内容的な要素 (例：SNS が登場する展開) に触れる。さらに書籍のジャンルや、タグの既出性とその明示非明示、タグの内容の一般性について述べ、引用・暗示引用の観点から表現の効果进行分析し、書籍の表紙・カバー上での当該表現には、SNS 上での用法と共通するもののほか、SNS 自体や SNS 上での関連概念を想起させる効果を持つものがあることを記述的に論じる。

参考文献：(1) Androutsopoulos, J. 2024. “The Offline-Online Nexus.” In Blackwood, R., S. Tufi, and W. Amos (eds.) *The Bloomsbury Handbook of Linguistic Landscapes*, 441-455. New York: Bloomsbury USA Academic. (2) Caleffi, P. M. 2015. “The ‘Hashtag’: a New Word or a New Rule?” *SKASE Journal of Theoretical Linguistics* 12(2), 46-69.

研究発表④ 解消される暗示性 —YouTube 動画における暗示引用の談話分析—

平川 裕己 (気象大学校)

本発表は暗示引用の効果を談話分析の観点から論じる。暗示引用はこれまで書記談話の事例を基に論じられてきた (小松原 2024; 佐藤 1992: ch.8; 瀬戸 2022) が、このレトリック技法は対面の口頭談話でも使用される。

(4) ぐんぴい：(右手の人差し指を振り上げながら) (a)人間が多すぎる！ () して

土岡： (笑) (b)なんで米倉涼子になる

(中略)

ぐんぴい： (c)携帯が高すぎる そういうふうに思うんですよ

(<https://www.youtube.com/watch?v=EsiGJaZSPAk>)

(4a) が伴う身振りと声調は、ある CM の台詞 (4c) を想起させる暗示引用である。この特徴は元話者の同定と引用の動機の問い (4b) を導き、それがさらに引用者による元台詞の再現 (1c) を引き出す。対面的な口頭談話での暗示引用は、このように後続のやりとりで引用元が明かされる場合がある。

本発表はこの談話展開を暗示引用の効果として記述するとともに、レトリック研究が対面の口頭談話を考察に加える意義を示す。

参考文献：(1) 小松原哲太ほか(編). 2024. 『日本語レトリックコーパス』 <https://www.kotorica.net/j-fig/> (2) 佐藤信夫. 1992. 『レトリック認識』 東京：講談社. (3) 瀬戸賢一. 2022. 「引喩 (暗示引用, allusion)」 瀬戸賢一・宮畑一範・小倉雅明. 『[例解] 現代レトリック事典』 376-381. 東京：大修館書店.

【ワークショップ 2】 (10:00~12:00)

会場：Room2 ()

●解釈の構築をめぐる語用論的メカニズム — 関連性理論からみた柔軟性と制約

オーガナイザー：笹本 涼子 (奈良女子大学)

本ワークショップでは、認知語用論、とりわけ関連性理論 (Sperber & Wilson 1986/1995) の枠組みを用い、言語解釈の柔軟性がいかに制約付きで実現されるかを考察する。発話解釈が文脈や受け手の認知資源に大きく依存することは知られているが、商品名や SNS 表現、ドラマのセリフ、日本語ラップの歌詞などは、話し手の意図を効果的に伝える創造的なメディアである。形式的には標準的文法構造と異なるものもあるが、実際の使用においては話し手と聞き手の間で認知環境が相互顕在化し、豊かな意味構築と柔軟な解釈が可能となる。つまり柔軟性は無制約ではなく、「語用論的ルールありきの自由」であり、その両立が重要な課題となる。日常のかつ創造的な言語使用を分析し、明示的・非明示的内容、処理労力と認知効果のバランス、類似性を含む語用論的制約を検討しつつ、参加者の意見も交えた活発な議論を通して、解釈の柔軟性とその理論的枠組み、さらに関連性理論の応用可能性を考える。

参考文献：Sperber, D., & Wilson, D. 1986/1995. *Relevance: Communication and cognition*. Oxford: Blackwells.

研究発表① 日本語ラップにおける韻と造語—解釈的類似性と認知効果

黒川 尚彦 (大阪工業大学)

本発表では、日本語ラップの歌詞の関連性理論的分析を試みる。ラップ音楽では韻を踏むというルールがある。このルールはことばの選択に制約をかける一方で、逆に歌詞が心地よく聞こえ、意外なことばの連鎖が通常の言葉遣いにはない効果を生み出すことがある。これを踏まえ、以下の2点を明らかにすることを試みる。

第1に、韻が歌詞の解釈に及ぼす影響である。日本語ラップの韻に関する音声学的研究には Kawahara (2007) などがあるが、ここでは語用論的側面に焦点を当て、韻が歌詞の理解にどのような影響を及ぼすかについて関連性理論の認知効果の観点から論じる (Wilson & Wharton (2006) も参照)。

第2に、歌詞に見られる造語の解釈に焦点を当てる。造語は既成語を元に新たに作られることが多く、必然的にその解釈には元となる既成語との類似性と相違性が関与する。この2つの側面に加えて、既成語の「引用」という側面について解釈的類似性の観点から論じる。

参考文献：(1) Leech, G. 1969. *A Linguistic Guide to English Poetry*. London: Longman. (2) Kawahara, S. 2007. Half rhymes in Japanese rap lyrics and knowledge of similarity. *Journal of East Asian Linguistics* 16.2: 113-144. (3) Wilson, D. & T. Wharton. 2006. Relevance and prosody. *Journal of Pragmatics* 38.10: 1559-1579.

研究発表② SNS 投稿に見られる疑問発話の語用論的曖昧性—『それ、何の役に立つんですか?』型表現の解釈の揺らぎと応答傾向

後藤 リサ (関西外国語大学)

本研究は、SNS 投稿上の疑問発話に対する応答傾向から、発話解釈の揺らぎを捉えることを目的とする。応答が一律であれば解釈は安定しているとみなせるが、応答に多様性が見られる場合、その発話は複数の解釈可能性を孕むと考えられる。こうした仮定の下で、本研究は関連性理論の「解釈的類似性 (interpretive resemblance)」の概念に基づき、解釈の揺らぎを分析する。分析対象として、X (旧 Twitter) 上の「○○って意味あるの?」「○○って何の役に立つの?」といった形式を含む投稿を、フレーズ検索およびハッシュタグ検索を併用して収集した。英語では、Oraby ら (2017) や Ranganath ら (2016) が X (旧 Twitter) 上の修辞疑問を #sarcasm や #rhetoricalquestion のタグを用いて分析しているが、日本語では同様の手法が有効ではないため、異なる方法を取ることにした。収集した投稿に対する応答コメントを分析し、反応の方向性 (共感・同調・反発・揶揄など) と多様度を指標として、解釈の揺らぎとの関係を検討する。

参考文献：Oraby, S., Harrison, V., Misra, A., Riloff, E., & Walker, M. 2017. Are you serious?: Rhetorical Questions and Sarcasm in Social Media Dialog. *Proceedings of the 18th Annual SIGdial Meeting on Discourse and Dialogue*,

研究発表③ 類似性から見た名付けと印象

笹本 涼子 (奈良女子大学)

本発表では、名前とそこから生じる印象との関係を、関連性理論の枠組みに基づいて考察する。従来の研究では、窪菌 (2008) や北澤・米元 (2016) に代表されるように、言語構造や音声構造の観点からネーミングを分析するものが多いが、言語形式が印象形成にどのように関与するのか、語用論的推論の観点からの分析は十分とはいえない。本発表では、日常的に見られる創造的言語使用—「ガリガリくん」「オーザック」「ぼてじゅう」といった商品名のオノマトペ使用、あだ名 (例:「ゴリ先生」) やヨガのポーズ名 (例:「戦士のポーズ」)—を例に、名前が非命題的類似性にもとづいて印象を生み出す仕組みを分析する。特に、“showing and meaning” および「意味の決定性—非決定性の連続体」(Sperber & Wilson 2015) に基づき、名付けは文脈依存的で柔軟な語用論的解釈の産物であり、印象は明示的意味に加えて語用論的推論によって構築されることを示す。

参考文献: (1) 北澤尚・米元大輝. 2016. 「『ゆるキャラ』 ネーミングの形態論」、『東京学芸大学紀要, 人文社会科学系 I』 67: 49-57. (2) 窪菌晴夫. 2008. 『ネーミングの言語学—ハリー・ポッターからドラゴンボールまで—』 開拓社. (3) Sperber, D., & Wilson, D. 2015. Beyond speaker's meaning. *Croatian Journal of Philosophy*, 15(44), 117-149.

研究発表④ 文末表現「(ん) だし」についての一考察

長辻 幸 (公立小松大学)

日本語の節等位接続形式の 1 つであるシ形が「わけわかんないし」のように終助詞的に使用されることは、これまで入江 (2022) 他で指摘されている。本発表では、その発展と考えられる文末表現「(ん) だし」に着目し、関連性理論の枠組みを用いて、当該表現が接続形式からの連続体の中で捉えられることを示す。例えば、特撮テレビドラマに登場する若い女性戦士の発話「冷え性になったんだし!」は、自身の攻撃が敵に命中し、相手が震えて応戦できない状況で、その理由を得意げに説明している場面で発せられている。このような文末表現「(ん) だし」を用いた発話は、従来の研究が主張するような話者の否定的態度を必ずしも伴わず、様々な話者態度や聞き手へのツッコミ等を伝達するが、これらの解釈は語用論的推論により生じることを明らかにする。また、当該表現を巧みに使用した CM 等、より柔軟な解釈が見られる事例についても考察する。

参考文献: (1) 入江祐希奈. 2022. 「文末で用いられる助詞「し」の終助詞的用法」、『日本語学会 2022 年度春季大会予稿集』、43-48、日本語学会. (2) Nagatsuji, M. 2021. *The Pragmatics of Clausal Conjunction*. Hituzi Syobo.

【ワークショップ 3】 (10:00~12:00)

会場: Room3 ()

●言語の中の「形あるもの」とそうでないもの:「形式」という概念の再定義に向けて

オーガナイザー: 木下 蒼一郎 (慶應義塾大学/日本学術振興会特別研究員 PD)

言語の形式(form)に関してはしばしば「私たちは意味そのものを知覚できないため、意味の伝達を成立させるには知覚可能な形式を用いる必要がある」と言われる(池上 1983: 2-3)。ただしここでの「知覚可能な形式」を単なる刺激とみなすことはできない。ソシュールがシニフィアンを心的な像(聴覚映像)として規定したように、意味が宿る形式は感官への刺激に解釈を加えたものであるからだ。例えばある手の動きが挨拶を意味するとき、その形式は聞き手の視細胞への光学的な刺激ではない; その刺激は「話し手が手を振っている」として意味づけられなければ形式の要件を満たさない。これを直截に受け入れると、私たちは意味によってしか意味を伝達できないことになる。このワークショップでは、①日本手話の発

話、②アイロニー、③暗示引用といった事例をヒントに、言語学における形式概念を再考し、それが視点に依存するという見方を提示する。

参考文献：(1) ド・ソシュール、フェルディナン. 1972. 『一般言語学講義』、小林英夫 (訳)、東京：岩波書店。(2) 池上嘉彦・山中桂一・唐須教光. 1983. 『文化記号論への招待：ことばのコードと文化のコード』、東京：有斐閣。

研究発表① 視覚言語における「透明な」発話形式

松田 俊介 (東京大学)

(1) に写っているのは身体のみであるが、聞き手は話し手の腕の中にギターを見出す。この「透明なギター」は手指動作そのものではないが、聞き手に「知覚」されることで日本手話の文を構成する。

(1)



この透明なギターは、ひとたび出現すると一定時間 **signing-space** に残る。例えば (1) の直後にこれを下に叩きつける身体動作を後続させることで《ギターを叩き割る》という意味の文を作れる。さらにはこの文を発話した直後に足元を指差すことで、割れた透明なギターを先行詞とする照応を実現できる (このとき、足元以外の場所を指差した場合は不適格)。このことは、身体から切り離された透明なギターが **signing-space** における明確な「位置」を持ち、日本手話の文の構成素となっていることを示している。日本手話はこのように、虚構的な対象を言語体系の中に組み込むことで、身体そのものを越えた「形式」を生み出しているのである。

参考文献：(1) Goldin-Meadow, Susan & Diane Brentari. 2017. “Gesture, sign and language: The coming of age of sign language and gesture studies.” *Behavioral and brain sciences* 40, e46. (2) 市田泰弘. 2005. 「手話の言語学: 空間の文法」、『言語』34 (6), 90-98. (3) 北岡明佳. 2001. 「錯視のデザイン学」、『日経サイエンス』2, 134-135. (4) 篠原俊吾. 2019. 『選択の言語学: ことばのオートフォーカス』東京：開拓社。

研究発表② 音声言語における「聞こえない」発話形式

木下蒼一郎 (慶應義塾大学/日本学術振興会特別研究員 PD)

この発表では、日本手話の「透明な発話形式」と同種のものが、演技・言語的アイロニーにも見出されるということを述べる。観劇者が舞台上に幻視する諸対象は、「透明なギター」と特徴を同じくする。例えば銃撃のシーンが演じられるとき、観客は実際には存在しない銃や銃弾を見出す。これらは「狭い意味で知覚可能」なものではないが、それらを見出さなければ演劇の意味を理解できないという点で「形式」の役を果たしている。同様に、友人に裏切られ「俺は本当にいい友達を持ったよ」と発話する人物は、当該文脈上不適切な発話をエコーする (Wilson 2006, 他) ことで、その発話を帰すべき架空の人格を提示している。この人格もまた「狭い意味で知覚可能」ではないが、聞き手がそれを見出さなければ言外の意味が伝達できないという点で「形式」の役を担っている。このように、既に意味づけられたものが「形式」として別の意味を宿すことは決して珍しくない。

参考文献：Wilson, Deirdre. 2006. “The Pragmatics of Verbal Irony: Echo or Pretence?” *Lingua* 116 (10), 1722-1743.

研究発表③ 使用事象の多層性：認知言語学の観点から

氏家 啓吾 (東京都立大学[非])

認知言語学および構文文法において、記号 (構文) は形式と意味のペアとして規定される。本発表では、使用事象の行為としての側面に焦点を当て、形式と意味の間の関係を再考する。使用事象は、行為一般にみられる手段と目的の入れ子構造を反映して、Austin (1962) が提示したような音声行為・用語行為・発話内行為等からなる階層を持つ。また、暗示引用の事例や、慣用句の一要素のみを提示する事例 (「高価な品を清水購入する」など) の分析から、記号を使用する行為の内部にもミクロな手段・目的の重なりが存在することが判明する。この多層性を考慮すると、あるレベルに視点を置いた場合の「意味」(目的) が、同時に上位のレベルにおける「手段」(形式) でもあることに矛盾はない。

参考文献：Austin, John L. 1962. *How to Do Things with Words*. Oxford: Oxford University Press.

【ワークショップ 4】 (10:00~12:00)

会場：Room4 ()

●Novel Imitates Normal —模倣と創造の言語学—

オーガナイザー：木村 快 (慶應義塾大学[院])

言葉に潜む傾向や規則を見つけたと思っても、それらに反するような表現や事例に遭遇してしまうのが常である。人間は経験に基づいて言語知識を構築し使用していると考えた立場(e.g. 使用基盤モデル (Barlow & Kemmer 2000))があるが、この立場でも逸脱表現の創造的使用を包括的に説明できなければならない。しかし、逸脱表現を対象とした研究は少なくないが、その創造的使用が既存の言語知識に深く根付いているという点は見逃されがちである。本ワークショップでは、3つの英語の逸脱表現を取り上げ、それぞれがその談話上の文脈に強く動機づけられていること、そして、形態統語的特徴から意味論・語用論的特徴まで、あらゆる言語学的側面で既存の表現・知識の使用実態を反映しうること—すなわち“模倣”であること—を確認し、創造的逸脱表現は“模倣的使用”の産物であることを論じたい。

参考文献：Barlow, M. and Kemmer, S. 2000. *Usage-based models of language*. Stanford: CSLI Publications.

研究発表① You're Wrong—No, You Are —英語応答表現に見る逸脱と規範への模倣—

浜田 啓志 (杏林大学ほか[非])

本発表では、(1)のような[no+肯定]という英語の逸脱的に応答表現に異なるレベルでの「模倣」が複層的に関与していることを、Corpus of Contemporary American English (COCA: Davies 2008-)で収集した実例を基に論じる。

(1) A: You're stupid, Jack.

B: No, you are.

(COCA)

1点目に、(1)においてBはAによる先行発話を「模倣」している。平叙文に対して平叙文で応答している点や、youの指示対象に移ろいがある点で、ここに表層レベルでの模倣が認められる。2点目に、逸脱的な応答では、規範的な応答が「模倣」されている。例えば、規範的な[yes+肯定] (e.g. Yes, I am.)と同様に、[no+肯定]においても主語代名詞と補助動詞は原則的に縮約されない。一方、同じ規範的な応答でも[no+否定]においては縮約は一般的である(e.g. No, I'm not.)。このことから、規範的な構造は左から右への足し上げで模倣されているのではなく、[応答辞+非縮約の簡略節]という抽象的なパターン全体に基づいた模倣がなされており、これが整合性を超えて再利用されていることがわかる。

参考文献：Davies, M. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.

研究発表② God Bless Everyone Whom of Which Deviates from the Standard—新奇関係詞 whom of which の起源を探る—

吉川 正人 (群馬大学)

本発表では、近年ウェブ上などで観察される whom of which という新奇関係代名詞 (以下 WoW) を取り上げ、その由来として特定の既存表現が考えられることを論じる。WoW は who(m)と同様の分布を示しており (Evile & Pesetsky 2023), who(m)を用いればよいところに of which が付加されている点に逸脱性があるが、ウェブコーパスやソーシャルメディア上のデータから、1) 主格で用いられる傾向が強い、2) 非制限用法が比較的多数である、3) 先行詞との間にピリオドなどがあり文頭で用いられるケースが一定数見受けられる、といった特徴が浮かび上がる。ここから本発表では WoW の実例の多くが all of which というフレーズの特徴を引き継いでいるという仮説を提案し、大規模コーパス (COCA) で all of which 等複数の of which を含むフレーズの分布上の特徴を確認することで検証する。

参考文献：(1) Evile, K., and Pesetsky, D. 2023. Wh-which relatives and the existence of pied-piping. *Glossa: A Journal of General Linguistics*, 8(1). (2) Davies, M. 2008-. *The Corpus of Contemporary American English*. Available online at <https://www.english-corpora.org/coca/>.

研究発表③ In Short, “In Long” Is Emerging—英語の談話標識の新奇表現 in long と模倣—

木村 快 (慶應義塾大学[院])

本発表では「模倣と創造」の観点から英語の新奇表現 in long について論じる。英語の＜先行内容の要約＞の談話標識である in short は定着した表現である(松尾ら 2015)のに対して, short の対義語である long を利用した in long という表現は規範的には“ない”が, インターネットや SNS 上では in long の事例が観察できる。In long の語法上の特徴として, 1) in short—in long というペアで用いられ, 先行する in short で＜簡略提示＞を行った後に, 2)＜詳細提示＞を示すほか, 3)特に SNS の投稿では＜前言の強調＞として働く“言葉遊び”的な事例もある。以上の特徴を踏まえながら, 本発表では in long が既存の知識(e.g. short—long の対義関係)や強い談話的制約に動機づけられた, in short を形式的・意味的に“模倣”して創発した新奇表現であることを論じる。

参考文献：松尾文子・廣瀬浩三・西川眞由美. 2015. 『英語談話標識用法辞典—43 の基本ディスコース・マーカー』, 東京：研究社.

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room1 ()

1—司会：

司会補佐：

1—①13:00~13:35

De-gendering The Account of ‘Gendered’ Pronouns

KASAHARA, Shuu (Aoyama Gakuin University [GS])

Focusing on pronominal choices regarding trans and gender-non-conforming referents, in this paper I argue that it is insufficient to analyze the so-called gendered pronouns in English as solely determined by natural gender. Instead, I propose an alternative account—the Set of Pronouns View: The non-propositional content conveyed by a gendered pronoun is, that the used lexical item is a member of the set of pronouns for that referent, where set of pronouns is the set of all items selected from the speaker’s inventory of pronouns such that (i) the items reflect the most prioritized relevant information available about the referent; and (ii) the cardinality of the set does not exceed the maximum number of items acceptable in the set. This account captures both the variability in pronominal choices, such as the use of she/her for nonbinary referents, and other phenomena such as the resistance to neopronouns among progressive speakers.

References: (1) Conrod, K. 2019. “Pronouns Raising and Emerging.” Doctoral dissertation, University of Washington. (2) Kirk-Giannini, C.D., and M. Glanzberg. 2024. “Pronouns and Gender.” In E. Lepore and L. Anderson (eds.), *The Oxford Handbook of Applied Philosophy of Language*, 265-292. Oxford University Press.

1—②13:40~14:15

German as an L3: Development of Pragmatic Competence in Chinese Students of German Studies—Findings from a Qualitative Pilot Study

ZHANG, Bin (Technische Universität Dresden, Germany) • ZHANG, Xiaoling (Beijing Foreign Studies University)

In an increasingly multilingual world, acquiring a third language (L3) presents both challenges and opportunities, particularly in university foreign language education. Building on research into pragmatic development in second and foreign language contexts (Bardovi-Harlig 2009; Alsuhaibani 2022), this qualitative pilot study investigates the development of pragmatic competence among Chinese students majoring in German, who typically learn it as a second foreign language after English. Using questionnaires, placement tests, and input-based text elicitation, data from 45 students across three academic years were analyzed for pragmatic strategies, lexical gap compensation, and textual organization. Results reveal developmental progress, especially in the use of connectives, improvisational meaning-making, and culturally influenced narrative patterns. The findings highlight pragmatic development as a

dynamic interplay between language, cognition, and culture, contributing to a more nuanced understanding of guided L3 acquisition and its pedagogical implications.

References: (1) Alsuhaibani, Zainab (2022): Developing EFL students' pragmatic competence: The case of compliment responses. *Language Teaching Research* 26(5), pp. 847-866. (2) Bardovi-Harlig, Kathleen (2009): Pragmatics in second language acquisition. In: Susan M. Gass & Alison Mackey (eds.): *The Routledge Handbook of Second Language Acquisition*, pp. 147-162.

口頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room2 ()

2ー司会：

司会補佐：

2ー①13:00~13:35

禁止サインのレトリック—隠喩が関与する事例の分析

平川 裕己 (気象大学校)

街中の禁止看板には、サインに擬人法の隠喩が関与する事例 (e.g. タバコを吸う禁止記号 (🚭), 缶をポイ捨てするゾウの図像) が存在するが、それらはこれまでの研究でほとんど扱われてこなかった。本発表はこうした隠喩を比喩の動機と機能の観点から分析する。

禁止看板における擬人法の使用は、この種の看板の基本的な性格に動機づけられている。つまり、禁止の主体や対象はいずれも人であるため、禁じる行為や禁止の対象行為を隠喩によって図像化する際に擬人法が選ばれるのはごく自然である。他方、禁止看板において擬人法の使用は必須ではない。だが、擬人法は非現実性によるユーモアを加える (小倉 2022) ため、禁止の拘束力を緩和し閲覧者の反発を回避するストラテジ (岸江 2011: 221) として機能する、理に適った表現手法なのだ。

以上の分析に基づいて、本発表では言語景観のテキストを対象としたレトリック研究の意義と可能性も論じる。

参考文献：(1) 小倉雅明. 2022. 「おもしろく、わかりやすく」 瀬戸賢一・宮畑一範・小倉雅明. 『[例解] 現代レトリック事典』114-115. 東京：大修館書店.(2) 岸江信介. 2011. 「看板・標示物にみられる禁止表現の言語景観」内山純蔵(監修) 中井精一, ダニエル・ロング(編) 『世界の言語景観 日本の言語景観—景色のなかのことば—』218-226. 富山：桂書房.

2ー②13:40~14:15

広告言語における緩和表現装置とパロディ表現装置：含意と法的境界の語用論的分析

有光 奈美 (東洋大学)

本研究の目的は、広告言語の含意と法的境界の交渉過程を、緩和表現装置 (mitigation expression device) とパロディ表現装置 (parody expression device) という二つの言語的仕組みの比較を通じて明らかにすることである。ここで言う装置とは、単なるレトリック (修辞法) ではなく、特定の機能を発揮するために意図的に設計された言語的仕組みを指す。緩和表現装置は主張をあえて弱めて解釈の余地を残し、法的リスクを低減する。一方、パロディ表現装置は既存ブランドとの類似性と差異の活用によりユーモアや話題性を生み、責任を回避する戦略である。両者は表面的には逆方向の機能だが、含意を用いて法的境界を回避する点で共通する。本研究はこうした装置を景品表示法や商標法等の法規制に対する合法か違法かの線引きではなく、言語実践と法制度が相互作用して合法領域を協働構築する仕組みとして捉える。この境界は固定の線ではなく、言語、法、社会が関わり合う動的領域として構成されることを指摘する。

参考文献：(1) Fairclough, N. (1989). *Language and power*. Longman. (2) Grice, H. P. (1975). Logic and conversation. In P. Cole & J. L. Morgan (Eds.), *Syntax and semantics, Vol. 3: Speech acts* (pp. 41-58). Academic Press.

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room3 ()

3-司会：

司会補佐：

3-①13:00~13:35

日常会話における気づきによる活動の脱線と復帰—話し手による脱線開始のケースを中心に—

李 鳳梅 (京都大学[院])

本研究の目的は、日常会話において、発話順番を取っている話し手が何らかの事柄に気づいたことを契機に、それまで自身が構築してきた発話の軌道を変更し、進行中の活動から一時的に脱線して元の活動に復帰するという相互行為上の現象を、参加者がどのように認識可能なものとして構成しているかを明らかにすることである。従来の談話研究は、言語形式や意味内容の連続性に基づいて会話の一貫性を捉えてきたが、会話中で一時的にやりとりが途切れながらも再び連続性を取り戻す現象は、こうした観点だけでは十分に説明できない。本研究では、会話分析の手法を用い、『日本語日常会話コーパス』(小磯ほか, 2023) の事例を検討した。その結果、話し手の気づきの表明は、進行中の活動の途中において、活動の脱線を相互に理解可能なものとした。また、脱線後では、談話標識やキーワードの再利用を通して元の活動との一貫性を再構築し、復帰を達成していた。

参考文献：(1) 小磯花絵・天谷晴香・居關友里子・臼田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉・渡邊友香. 2023. 「『日本語日常会話コーパス』設計と特徴」、『国立国語研究所論集』24、153-168. (2) Schegloff, E. 2007. *Sequence Organization in Interaction: A Primer in Conversation Analysis*. Cambridge, England: Cambridge University Press.

3-②13:40~14:15

公共掲示物の行為促進型表現に見るポジショニングの日仏語対照研究

谷 智子 (関西外国語大学)・岸本 聖子 (愛知県立大学)

本発表では、公共掲示物に見られる行為促進型表現がどのように読み手に特定の行為を促しているのかを、日本語とフランス語について、ポジショニング(Davies and Harré 1990)の観点から考察する。

日本語では、例えば、依頼の際に「V-ましょう」型表現を用いることで聞き手に寄り添い、共に行為を遂行する者としての「立場」を取ったり、禁止の際には文末に丁寧体を用いるという文体操作を行うことで読み手と距離を取り、厳格な「立場」を取ったりするものがある。

フランス語では、依頼の際に1人称主語 *je* を用いることで個人の「立場」をとり、掲示の内容がまるで読み手個人の自発的な意思であるかのように行為を促すという、日本語では見られないポジショニングのあり方が見られた。

本発表では、ポジショニングを、読み手心理を操作する一種の語用論的ストラテジーとして捉え、両言語の特徴と相違点について詳察していく。

参考文献：Davies, B. and Harré, R. 1990. "Positioning: The Discursive Production of Selves." *Journal for the Theory of Social Behavior* 20(1), 43-63.

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room4 ()

4-司会：

司会補佐：

4-①13:00~13:35

不同意談話における話題管理の比較—日本語母語話者と学習者の配慮を焦点に当てて—

孫 雨欣 (広島大学)

本研究は、日本語母語話者(母語話者)と中国語を母語とする日本語学習者(学習者)の不同意談話における話題管理を比較し、その背後にある配慮行動の相違を明らかにすることを目的とする。自然会話コーパスから抽出した不同意発話連鎖110例を分析対象とし、話題推移と話題内容の観点から検討した。

分析の結果、評価に対する不同意において、母語話者は対立回避のため「新規話題導入」を多用する傾向があり、学習者は関係維持のため同一話題内で「側面への言及」を行う傾向が示された。話題内容では、母語話者が「客観的事実」や「第三者」を選択し発話権を譲るのに対し、学習者は「自己開示」を通じて会話へ貢献する傾向が顕著であった。これらは、母語話者の相互協調的、学習者の独立的な自己観に基づくスタイルの差異を示唆する。

参考文献：(1) 大津友美 (2001)「雑談における共感作りのためのコミュニケーション行動：不一致を表明する際の緩和処置について」『言葉と文化』2：211-222。(2) 筒井佐代 (2012)『雑談の構造分析』くろしお出版。

4-②13:40~14:15

「コロナ禍」の語りから見える医療をめぐる問題とアイデンティティの変化

木場 安莉沙 (名古屋文理大学)

本発表では、日米でエスニック・マイノリティとしてコロナ禍を経験した人々のインタビューデータを取り上げ、ナラティブ・(ベイスト・) インクワイアリー (荘島 2008) の手法を用いて分析する。特に、医療アクセスへの不平等や医療の場における多言語コミュニケーションなど、コロナ禍における医療・言語の問題や、それにより顕在化したアイデンティティの変化・逸脱に焦点を当てる。震災の記録が地域知・防災知として重要であるように、今後も起こり得るパンデミックに備えてコロナ禍のナラティブを集積する必要性を指摘する。

参考文献：荘島幸子. 2008. 「ナラティブが生成される重層的コンテキストとその解釈—次なるナラティブ・ベイスト・インクワイアリーに向けて—」、『京都大学大学院教育学研究科紀要』54、138-151.

ポスター発表 (14:20~15:20)

会場：

会場担当：

① Intercultural Mediation as an Act of Pragmatic Awareness and Learning: Focus on Japanese BELF Users in International Companies

ARAKI, Saki (Independent)

This poster presents the findings of a case study on the pragmatic use of English by two Japanese professionals working in an international enterprise and an airline company. The data was collected through discourse completion tests (DCT) and semi-structured interviews. The DCT included three scenarios requiring apologies and negotiations. The interviews explored the participants' language use in their professional and educational experiences. The results revealed that the participants' use of English varies based on job requirements: one focuses on conveying information clearly and quickly, while the other prioritizes politeness with clients. Additionally, the participants' roles as intercultural mediators in English as a Lingua Franca (ELF) are evident, though their confidence and success in this role appear limited. The study highlights several methodological limitations, including the interview questions and critiquing DCT, which led the researcher to reconsider the direction of her doctoral thesis project.

References: (1) Liddicoat, A. J. 2022. Intercultural mediation from a perspective of linguistic pragmatics. In B. Dominic (Ed.), *The Routledge Handbook of Intercultural Mediation*. Routledge. (2) Schauer, G. A. 2024. *Intercultural Competence and Pragmatics*. Palgrave Macmillan.

② プロ棋士の発話に見られるメトニミーの語用論的機能 —「難しい将棋」といった表現をめぐって—

岩間 由依 (北星学園大学[院])・柳町 智治 (北星学園大学)

本研究では、プロ棋士が対局直後のインタビューに答える際に、本来「展開」や「局面」で表現されることを「難しい将棋」や「申し訳ない将棋」など、「将棋」のメトニミーを用いる現象を取り上げる。「将棋」のメトニミーによって視点が「target」である「展開」や「局面」などから「reference point」の「将棋」にずらされる(Langacker 1993)ことで、対局の勝者あるいは敗者が直接的な物言いを回避したり、さらには将棋コミュニティに属するプロとして発話し振る舞うなど、Littlemore (2015)が議論するように、メトニミーが語用論的機能を果たしている可能性がある。本発表ではこの点を検討する。

参考文献：(1) Littlemore, J. 2015. *Metonymy: Hidden Shortcuts in Language, Thought and Communication*. Cambridge: Cambridge University Press. (2) Langacker, R. W. 1993. "Reference-point constructions." *Cognitive Linguistics* 4, 1-38.

③バラエティ番組『水曜日のダウンタウン』の企画名における「文の包摂」 —ボックスティッシュ向けられたら特に必要じゃなくてもとりあえず1枚取っちゃう説—

泉 大輔 (立教大学)

本発表では、バラエティ番組『水曜日のダウンタウン』の企画名に見られる「文の包摂」(例:「どこの地元にも名物おじさんいる説」「スダチとカボス区別つかない説」「いい意味で」をつければどんな悪口でも怒られない説」「イカ四角く切ったらほぼナタデココ説」「手裏剣いっぱい持つと重い説」など「X説」とする)を扱う。「文の包摂」とは、「早く帰れオーラ」「困ったな状態」など語の内部に文相当の要素が包み込まれた逸脱的な現象である。この「X説」の構造的・語彙的・音韻的・モダリティ的・引用的な特徴を明らかにし、当該表現が視聴者に新奇な印象、好奇心、共感を喚起するとともに、ともしれば馬鹿馬鹿しく思われかねない内容を真剣に検証する企画名として機能し、番組の構成・演出を支える役割を果たしていることを示す。また、本発表が会話やSNS上で「可能性がある」という意味で用いられる「X説」の考察の足掛かりとなることを示唆する。

参考文献：泉大輔. 2024. 『現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究』東京：ひつじ書房。

④英語の付加疑問文の語用論的特性に関する一考察 —日本語・中国語・韓国語との比較対照分析から— 中谷 博美 (滋賀県立大学)

本発表は、英語の付加疑問文の持つ機能に関して、他言語の文末表現との比較対象分析により、その語用論的特性の本質に迫ることを目的とする。具体的には、映画における付加疑問文の使用例とその日本語、中国語、韓国語訳を用いて、付加部の構造分類と意味機能特性の分析を行った。さらに、オリジナルの英語音声データも加えて構造と意味機能特性の関連性を考察した。この比較対照分析の結果として、もともとの形式が持つ「疑問」の意味機能に加え、話し手の「推量」が高い確率で含まれていることが得られた。こうした一見すると矛盾する「推量」と「疑問」を併せ持つ文末表現の語用論的特性について、森山 (1992) の「ダロウ疑問文」の分析を援用して説明を与える。これにより、Wierzbicka (2006) で示される、英語の付加疑問文の中心的意味機能とその拡張的使用について、形式に内在する推量モダリティの観点から明らかにできると考える。

参考文献：(1) 森山卓郎. 1992. 「日本語における「推量」をめぐって」『言語研究』101, 64-83. (2) Wierzbicka, Anna. 2006. *Cross-Cultural Pragmatics*, Mouton de Gruyter, Berlin.

⑤なぜ「まっすぐ」で終わらないのか? : 運転における『知識』と『認識』の交渉

直井 瞭 (東京都市大学[学部])・畑 和樹 (東京都市大学)

高速道路の入口や分岐点など進路選択が求められる場面で、運転手と同乗者は進むべき道について言葉を交わす。一見単なる情報交換に見えるこれらのやりとりにおいて、参加者は進路選択の過程で「地図的な情報」と「進行方向に関する情報」を区別し、相互行為上の資源として活用している。本発表では、連鎖第1位置において運転手が同乗者に進行方向を確認する事例に注目する。第2位置で同乗者が「方向」を伝える発話で応答したことに対し、第3位置で運転手は「地名や道路名」を参照する発話を行う。このように地図的情報にあえて言及する運転手の発話は、進行方向に関する認識には確認を要した一方で、地理的知識は保持していることを示す実践である。その地理的知識が正しい限りは、全体的なルート取りには支障がないことが提示される。なお、扱うデータは複数の運転場面を録画した車載映像を会話分析の手法で分析したものである。

⑥GoVPing 構文が生起する文脈の選好性 —力動性を用いた分析の提案—

清水 京香 (同志社大学[院]/日本学術振興会特別研究員 DC2)

本発表の目的は、go が移動を示さない GoVPing 構文 (e.g. Don't go getting emotionally involved) が持つ語用論的特徴を Talmy (2000) の力動性という概念を用いて説明することである。当該構文には、VP で示される活動が話し手から否定的に捉えられるという語用論的側面や、否定命令文で生起する傾向が指摘されているものの、その実態は明らかでなく、この特徴が生じる背景も十分に説明されてこなかった。本

発表では、この語用論的特性を重要な構文的特徴と位置づけ、まずコーパス調査を行い、当該構文が VP の活動の実行を阻止する文脈で生起するという選好性を実証的に示す。そして、当該構文が VP の活動へ向かう主語の力とそれを阻害する話し手の心理的抵抗感の対立という力動性パターンを含むと想定することで上述の特徴が説明できることを示す。加えて、構文分析に力動性という観点を導入することで、類似構文との語用論的差異が説明できる可能性を指摘する。

参考文献：(1) Bourdin, P. 2003. “On Two Distinct Uses of Go as a Conjoined Marker of Evaluative Modality.” In R. Facchinetti, M. Krug & F. Palmer (eds.) *Modality in Contemporary English*, 103-127. De Gruyter Mouton. (2) Talmy, L. 2000. *Toward a Cognitive Semantics, Volume 1: Concept Structuring Systems*. MIT Press.

⑦日本語会話で用いられる代用表現「あれ」についての一考察 ―話し手のメタ認知的活動と「あれ」使用の関係に着目して―

杉山 郁美 (宇都宮大学[院])

本研究は、代用表現「あれ」の使用実態を対象とするものである。これまで「あれ」は、話し手において適切な語・表現の選択や検索に困難がある際に代用され、会話の進行性維持に寄与するとされてきた(迫田 1993, Kitano 1999)。しかし、話し手自身が具体的な内容を明確に把握していない(迫田 1993)場合であっても、「あれ」の使用が聞き手に問題とされないことがある。本研究では、その場合の談話構造の特徴を明らかにすることを目指す。分析には、TV 番組 1 回放送分の対話において観察された 4 種の用例を用い、うち 2 種はメタ認知とは無関係に使用されることがわかった。さらに、同種の用例を自然会話コーパスから抽出し分析した結果、「あれ」は、語用論的条件のもと、対人配慮を示したり、対比的に配置された一方を焦点化したり、質問行為を遂行したりするなどの発話の機能があることが明らかとなった。

参考文献：(1) Kitano, Hiroaki. 1999. “On Interaction and Grammar: Evidence from One Use of the Japanese Demonstrative Are (‘That’).” *Pragmatics* 9(3), 383-400. (2) 迫田久美子. 1993. 「話し言葉における指示詞コ・ソ・アの研究―日本人母語話者の発話資料に基づくコ・ソ・ア分類の枠組み―」、『教育学研究紀要. 第 2 部』(38)、409-414. 中国四国教育学会。

⑧沈黙の解釈差に見る共通基盤構築と自己中心性の相互作用

種市 瑛 (立教大学)・抽冬 紘和 (横浜市立大学)

本研究は、話し手 (S) と聞き手 (H) の間で「共通基盤 (common ground, CG)」(Allan 2023; Kecskes 2014) が構築・修正・調整される過程において、自己中心性が沈黙の出現と解釈にいかなる影響を及ぼすのかについて分析、考察した。S と H は CG を構築することで伝達や解釈に要する労力や時間を軽減している (Kecskes 2014)。加えて両者は、それぞれの知識や経験を参照し、やりとりを通じて自己中心的に CG を想定・更新している (Allan 2023)。以上の枠組みに基づき、日本人女子大学生による約 14 分の対話と両者への半構造化インタビューの内容を分析した結果、沈黙は CG の動的な構築と調整の局面に現れること、ならびに S と H の自己中心性の不一致が意味付けに差異を生じさせることが示された。

参考文献：(1) Allan, Keith. 2023. “The Interdependence of Common Ground and Context.” In Istvan Kecskes (ed.) *Common Ground in First Language and Intercultural Interaction*, 7-24. Berlin: Mouton De Gruyter. (2) Kecskes, Istvan. 2014. *Intercultural Pragmatics*. New York: Oxford University Press.

⑨ツンデレキャラは本当にツンデレ表現を使うのか

田久保 紗貴 (法政大学[院])

本研究は、ツンデレキャラが実際に使用する言葉について、従来の役割語研究で目立つ形態素や句による統語論的分析ではなく、談話的な観点から分析することで、その特徴を明らかにすることを目的とした。分析対象としたデータは、代表的なツンデレキャラ 6 名の、ツンデレ表現が出現する可能性のある全発話、つまり好意を持つ相手への発話 2039 件である。先行研究で指摘されたツンデレ表現の 8 要素に、新たに「相手を貶す表現」「相手への命令・要求」の 2 つを加えた 10 要素を設定し、分析を行なった。その結果、以下の 2 点が明らかになった。1 つ目は、3 つ以上の要素を含む発話の約半数に「終助詞ネ・ヨ」「相手を貶す表現」「相手への命令・要求」という要素が出現する要素の組み合わせパターンが確認されたことである。2 つ目は、発話相手との上下関係により要素の出現傾向が異なり、上位者であるキャラには「発話頭のつかえ」が多くみられたことである。

参考文献：(1) 金水敏. 2003. 『ヴァーチャル日本語 役割語の謎』 東京：岩波書店. (2) 西田隆政. 2009. 「ツンデレ表現の待遇性—接続詞カラによる「言いさし」の表現を中心に—」. 『甲南女子大学研究紀要, 文学・文化編』 45, 15-23.

【基調講演 (Plenary Lecture)】 (16:15~17:45)

＜オンラインによる同時配信有＞

会場：Room1 ()

司会：／司会補佐：

ポエティクスと語用論の接点

片岡 邦好 (愛知大学文学部・文学研究科教授)

本講演では「詩」 (poetry) を文学的な産物に限定せず、反復や並行性といった「等価性」の原理にもとづき、多様な記号により構成される選択と結合の形式 (Jakobson 1960) と捉える。この理念を手掛かりに、日常の相互行為や社会实践に暗在する詩的な構造化の様相を検証してみたい。「詩」は単にことばによる創造的な行為にとどまらず、身体、事物、環境要因を巻き込みながら展開し、審美的な (かつ心地よい) 言語使用とは何かという点で、文化的な相対性の一側面であると同時に、暗黙の言語イデオロギーの発露ともなっている。本発表では、D. Hymes らが提唱した *ethnopoetics* (民族詩学) を端緒として、相互行為や儀礼的行為における(メタ)語用論的詩学 (Silverstein, Agha など) の展開を概観し、講演者の一連の研究から詩学のマルチモーダル分析への応用例を紹介する。

【講師略歴】

片岡 邦好 (かたおか くによし)

愛知大学文学部・文学研究科教授。談話におけることばと身体・感覚・情緒の詩的な相同性や、空間の言語学的・記号論的な統合に関心を持つ。社会言語科学会理事、会長などを歴任し、現在は日本語用論学会評議員。

主な著書に『メディア談話へのまなざし—クロスモーダル分析の試み』 (2024 年：ひつじ書房) 、*Language and Body in Space and Place* (2023 年：Bloomsbury Academic) などがあり、『社会言語科学』、*Journal of Pragmatics*, *Language & Communication*, *Journal of Linguistic Anthropology*, *Language in Society* などに多数の論文が掲載されている。

11 月 30 日 (日)

□頭発表 (9:00~12:20)

会場: Room1 ()

1-司会:

司会補佐:

1-①9:00~9:35

様態副詞と動詞の共起に関する研究

李 曉霜 (京都外国語大学[院])

本研究は、様態副詞と動詞の共起関係を解明することを目的とする。様態副詞と共起する動詞に特定の制限はないとした先行研究に対し、本研究は用例の認定や動詞分類の点で問題があると指摘する。そこで、44 語の副詞を対象にコーパス調査を実施した結果、様態副詞がオノマトペ派生動詞と共起しないという傾向を発見した。この点をさらに検証するため、「オノマトペ+する」形式の派生動詞 143 語と副詞の共起を追加調査したところ、様態副詞との共起は極めて稀であることが確認された。この結果から、様態副詞の共起動詞には、オノマトペ派生動詞とは共起しにくいという制約が存在すると結論づける。これは、オノマトペ自体が事態の様態を含意するため、様態副詞を伴うと意味的に冗長になることが原因だと考えられる。

参考文献: (1) 宮城信. 2014. 「動詞の共起傾向に基づく様態副詞の分類試案」、『日本語と日本語文学』57、15-26. (2) 仁田義雄. 2002. 『新日本語文法選書 3 副詞的表現の諸相』くろしお出版。

1-②9:40~10:15

視線が明らかにする指示詞選択のための語用論的・視空間的文脈

菅谷 友亮 (中京大学)

本研究は、現場指示 (直示) 場面における指示詞理解や産出時の視線を観察し、指示詞表現の認知プロセスを明らかにすることを目的とする。対象は日本語の指示詞コアソであり、英語や中国語の二項対立とは異なり三項システムであるため、その用法は複雑である。本研究では、指示詞選択に影響を与える条件を検討するため、様々な視覚刺激 (絵や写真) を作成し、判断対象までの距離、聞き手や比較対象の有無や配置、判断基準としてのパーティションの配置、空間の拡張、話者の指示手段などを操作した。手続きとしては、実験参加者が視覚刺激内の判断対象を指す指示詞を選択する課題、他者の指示詞使用を聞き手として理解しそれを評価する課題、自ら話者となって音声文に対する評価を行う課題を実施した。

1-司会:

司会補佐:

1-③10:25~11:00

LINE における「聞き手」という役割の変化 ―話し手による言い切り形の選択から―

甲斐 さくら (アジア日本語学院[非])

LINE は、対面会話・携帯メールと比較して言い切り形が多く、やりとりの素早さというメディア・モードとの関連が指摘されている (落合 2022)。しかし、やりとりのテンポなど最も素早いと思われる対面会話は、言い切り形が少ないとされる (甲田 2016a, 2016b 等)。本発表は、LINE トークデータにおける言い切り形について、メディア・モード以外の要因を探るため、文脈における相手発話や話し手―聞き手の役割関係といった「相手との関わり方」から検討する。言い切り形は、甲田 (2016a, 2016b) では「質問への応答」など隣接する相手発話に後続する文脈環境で最も多くみられたが、本データでは、相手発話に隣接しない文脈上独立した場面で話し手が主体的に自ら述べる際にもよく選択されていた。このような話し手の選択は、従来の話し手―聞き手の役割関係や「聞き手」の役割の変化を示唆すると考える。

参考文献: (1) 落合哉人. 2022. 「メディア・モードの機能は言語使用をどのように変えるか? ―携帯メール・LINE チャット・対面会話における終助詞の使用と不使用を例に―」、『筑波日本語研究』26、1-19. (2) 甲田直美. 2016a. 「「言い切り形」が生じる文脈環境」、『東北大学文学研究科研究年報』65、91-115. (3) 甲田直美. 2016b. 「言い切り発話の叙法論的把握」、『国語学研究』55、66-75.

1-④11:05~11:40

丁寧な依頼表現としての「てほしいです」「ていただきたいです」の使用について —Teams チャット上のやりとりの事例から—

山下 悠貴乃 (十文字学園女子大学)

中島 (2022) は「見てほしいです」が依頼を表せるかについて、「若い人を中心によく使われているが、ややくだけた印象のある表現」であると述べている。本発表では、このように一般的に丁寧な依頼としては不適切であると思われる「てほしいです」や「ていただきたいです」という言い切り形式について、Teams 上のやりとりを対象に、その使用実態と、それらの丁寧な依頼表現としての機能について分析する。その結果、《依頼》を表す文の中で、「てほしい」や「たい」などの願望表現が使用される割合は 12.0% と高くはないが、1 例を除いて全て言い切り形式であり、その使用条件として依頼内容の当然性の高さが関わっていることが示唆された。また、言い切り形式の丁寧な依頼表現としての機能については、「知りたいです」という表現が間接的《依頼》として働くこと、「丁寧な」というより学生間で上下関係がある相手にも十分「適切な」表現として機能することが明らかになった。

参考文献：(1) 東泉裕子・高橋圭子. 2023. 「依頼表現としての「ていただきたいです」—若年層による適切度判定—」、『アカデミック・ジャパニーズ・ジャーナル』15、19-27. (2) 中島沙織. 2022. 「放送用語委員会第 1454 回 (広島・リモート開催) 「見てほしいです」で“依頼”を表せる?」、『放送研究と調査』2022 年 3 月号、56-57.

1-⑤11:45~12:20

「草」の語用論的機能とメディアの影響—X と LINE における使用の比較—

北澤 茉奈 (杉野服飾大学)・高村 遼 (京都精華大学)

本研究は、日本語の笑いを表す表現「草」の語用論的機能を、X (旧 Twitter) と LINE という異なるメディア環境における使用実態の分析を通して明らかにすることを目的とする。「草」は「笑」のローマ字表記 wara の頭文字に由来し、連続する「w」(「www」) が草のように見えるという視覚的連想から生じた表現であり、近年では既存の笑い表現と併存しながら定着しつつある。不特定多数への発信型メディアである X と、親密な少人数によるやりとりを特徴とする LINE の 2 つ媒体を通して、「草」が予想外の出来事や発話の意外性を笑いとして共有しつつ、その解釈の方向性を主導し、暗示的な優位性を示す資源として機能することを示す。以上の分析から、「草」は単なる感情表現にとどまらず、相互行為の調整や関係性構築において機能する語用論的資源として位置づけられることを指摘する。

参考文献：(1) Goffman, Erving. 1974. *Frame Analysis: An Essay on the Organization of Experience*. Cambridge, MA. (2) Oberwinkler, Martina. 2020. “Emoticons in Social Media: The Case of Japanese Facebook Users.” In Giannoulis, Eleftheria and Wilde, Lorna R. A. (eds.), *Emoticons, Kaomoji, and Emoji: The Transformation of Communication in the Digital Age*. 104-124. New York.

□頭発表 (9:00~11:40)

会場：Room2 ()

2-司会：

司会補佐：

2-①9:00~9:35

短冊に書かれた言語表現の解釈における語用論的な影響と制約

白石 暖哉 (京都大学[院])・黒田 一平 (龍谷大学・京都ノートルダム女子大学・京都大学[非])

本研究では、七夕の短冊に注目し、短冊自体が『祈願・願望』と結びついた構文として機能することを示す。白石 (2025) は、通常は非祈願・願望的な形式が、短冊などの特定の媒体で祈願・願望解釈を受けることを示唆している。また黒田 (2025) は、特定の媒体やデザインが構文的な機能を持つことを指摘している。ここから、本研究では短冊自体が構文として『待ち望み (仁田 1991)』の解釈を強制する可能性を、実例を収集して指摘する。加えて、容認度調査により、(i) 文法的な制約：節が既に持つ意味 (疑問や事実性) との競合、(ii) 語用論的な制約：書記内容の ICM (望まれやすさ) と短冊の ICM (望ましいもの) の競合、という制約を明らかにした。本研究は、構文解釈における語用論的要因として、媒体・デザ

インが果たす役割を理論的に位置づけ、構文文法における「デザインの構文機能」という新たな視点を提示するものである。

参考文献：(1) 白石暖哉. 2025. 「現代日本語における非従属化構文『V ヨウニ』が表す祈願」、京都大学大学院 人間・環境学研究科 修士論文。(2) 黒田一平. 2025. 「構文としてのデザイン—「選挙ポスター」と「駅名標」を例に—」、『日本認知言語学会大会発表論文集』25、63-74。(3) 仁田義雄. 1991. 『日本語のモダリティと人称』東京：ひつじ書房。

2-②9:40~10:15

過去の事柄に向けられた命令文“過去命令”について：テンス・アスペクト・否定の観点から

野村 涼 (Stanford University[院])

本発表は「そんなこと言うな」のような既に起こってしまった事象がトリガーとなる命令文（「過去命令」）を尾崎(2007)の分析を深める形でテンス・アスペクト・否定の観点から分析する。現在の行動を対象にした「制止命令」と過去命令の区別は難しいが、否定命令文では否定される内容の存在や可能性が重要で、既に始まっている物事であればこの条件は担保される。そして、否定命令文で示された内容が偶然終わっていた場合に過去命令となるため、結果的に過去命令が多くなる。一方、肯定形命令文の場合、命令文の内容で示された内容がすでに始まっている場合、その命令文をあえて使う必要がないため過去命令となる命令文は必然的に少なくなる。

参考文献：尾崎奈津. 2007. 「日本語の否定命令文をめぐって—「スルナ」を述語とする文の特性と機能—」。『日本語の研究』(3)1, 65-79.

2-司会：

司会補佐：

2-③10:25~11:00

感情形容詞の副詞用法の研究—「嬉しく V・楽しく V」を例として—

王 一臻 (京都外国語大学[院])

本発表の目的は、「Adj く V」構文の自然度を規定する要因を明らかにすることである。具体的には、「嬉しく V」と「楽しく V」を取り上げ、両者の意味機能の差異を考察する。従来研究（森田 1977、菊地 2000、永谷 2022 など）は、時間的特性や共起動詞の傾向に注目してきたが、用例観察の結果、「嬉しく V」は行為者の心理反応が話者に共有可能かどうかによって左右され、主として主観的感情叙述に特化することが確認された。一方、「楽しく V」は持続的行為を話者が共感的に把握できる場合に自然に解釈されやすく、動作の客観的描写や意志表現に機能分化することが明らかとなった。本研究では BCCWJ コーパスに基づき、①動作主と話者の視点の一致・不一致、②構文に現れる動詞の特徴、という二つの観点から両構文を整理した。その結果、「嬉しく V」は「感情の主観的焦点化」、「楽しく V」は「動作・意志の客体化」を担い、両者が相補的分布を示すことを結論づける。

参考文献：(1) 菊地康人. 2000. 「タノシイとウレシイ」『日本語 意味と文法の風景—国広哲弥教授古稀記念論文集—』143-159 ひつじ書房 (2) 永谷直子 (2022) 『現代日本語における形容詞の連用用法—外面性／内面性に着目して—』くろしお出版 (3) 森田良行. 1977. 『基礎日本語』角川書店。

2-④11:05~11:40

「AハBダ」の使い方—名詞述語文から見た日韓の言語化戦略の違い

尹 盛熙 (関西学院大学)

本発表の目的は、日本語の名詞述語文及びその類似形式の使い方を観察し、この形式が談話の進行においてどのような機能を果たしているかを考察するとともに、類似した文法構造を持つ韓国語の場合とどのように異なるかを検討することである。具体的には、「A(ハ)」+「B(ダ)」など、二つの名詞(句)を隣接させるという単純な構造が示す機能的な多様性に焦点を当て、映画の台詞(英語)の日本語訳と韓国語訳を比較し、両言語における名詞述語文の例とその談話上の機能を観察する。英語原作の同じストーリーラインに基づいて談話が展開される上で、各言語が名詞述語文という道具をどのような場面で用いているのか、そこに各言語の特徴的なパターンはあるかについて考える。

参考文献：(1) 益岡隆志. 2008. 『叙述類型論』くろしお書店. (2) Youn, Sunghee. 2024. “How are Events Encoded?: Differences between Japanese and Korean.” *Japanese/Korean Linguistics* 31. 81-94.

□頭発表 (9:00～11:40)

会場：Room3 ()

3－司会：

司会補佐：

3－①9:00～9:35

Leave no stone unturned の形式と意味における創造性をめぐって

岩橋 一樹 (京都先端科学大学)

英語のイディオム leave no stone unturned はあらゆる手段を用いるという意味やあらゆる努力を行うという意味で本来使われる (市河他 (1964: 645-646), Long (ed.) (1979: 317)). しかし、これらのイディオム辞典に記載されていないが、このイディオムでは stone の代わりに voter や seat などといった他の名詞が使われることもある。本発表ではこのような場合のイディオムとしての意味の理解の仕方を考察する。それにより、このイディオムにおいて、stone や他の名詞を用いた場合、対象物をひっくり返すことは対象物を調べたり対象物に働きかけたりすることであるという想定が演繹的推論に使われ、対象物を調べたり対象物に働きかけたりするという動作に当てはまる緩められたアドホック概念が構築されることを主張する。このような解釈が成り立つと、調べたり働きかけたりする対象となる具体物や抽象物を指す様々な名詞が動詞 leave の目的語として使われることを主張する。

参考文献：(1) 市河三喜. (他) 1964. 『英語イディオム辞典』東京：研究社. (2) Langlotz, A. 2006. *Idiomatic Creativity: A Cognitive-Linguistic Model of Idiom Representation and Idiom-Variation in English*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins. (3) Long, T. H. (ed.) 1979. *Longman Dictionary of English Idioms*. Harlow: Longman.

3－②9:40～10:15

話題転換標識における which の指示機能に関する考察：聞き手の反応からわかること

山内 昇 (大同大学)

本発表では、第一に、話題転換標識(speaking of which, talking of which, which reminds me)における which の指示機能が希薄化したとする先行研究の主張について、その根拠とされたデータの解釈を再検討し、それらが実際には指示機能の希薄化を示す事例ではないことを指摘する。第二に、which の指示機能が不明瞭な場合における聞き手の反応を分析し、話題転換標識における which の指示機能は希薄化しないことを示す。第三に、Jefferson (1978) による会話分析の知見を援用し、話題転換標識中の which が先行詞を伴う理由について考察する。

参考文献：(1) 山内昇 (2020) 「Speaking of which の構文化分析再考」『英語語法文法研究』27, 103-118. (2) Jefferson, G. (1978) “Sequential Aspects of Storytelling in Conversation.” In J. Schenkein (ed.), *Studies in the Organization of Conversational Interaction*, 219-248. Academic Press.

3－司会：

司会補佐：

3－③10:25～11:00

物語中の発話が皮肉・嫌味、嘘、冗談、本音として理解されるための表情と声の情報

瀧澤 純 (宮城学院女子大学)

皮肉・嫌味、嘘、冗談などの字義の裏を読むようにして理解する言語表現を、非本音表現とよぶ。非本音表現どうしの区別がどのように成立するかが十分に明確にされてこなかったことから (例外として、瀧澤, 2024)、皮肉・嫌味、嘘、冗談、本音それぞれが区別される条件を明らかにすることを目的として本研究を行った。調査にて「とてもいい消しゴムだね」のような曖昧な発話を含む架空の物語を提示し、「この場面がもっと皮肉・嫌味らしく感じられるようにするために、場面の中の言葉や文章をどのように変更・追加するとよいか」などの質問に回答を求めた。結果、皮肉・嫌味は「ネガティブ笑い」、嘘は「抑揚なし」、冗談は「笑い」、本音は「真剣さ」のカテゴリーに該当する回答が多かった。以上から、

非本音表現の区別において表情や声に関する情報が重要であると考えられる。音声言語への一般化可能性、意図評価と語用論的理解との関連について議論した。

参考文献：瀧澤純 2024. 「言語行動検出理論の検証—本音、嘘、皮肉、冗談を区別する認知過程—」、『宮城学院女子大学研究論文集』138、109-122.

3-④11:05~11:40

付帯状況を表わす“without+名詞+過去分詞”の生起に関する認知言語学的・語用論的研究

森 貞 (福井工業高等専門学校)

本発表は、命令文および叙実文における「～しないで…」構文 (否定的付帯状況構文) の3つの英語訳、すなわち [1] 【without + 動詞 ing 形 + 名詞】、[2] 【with + 名詞 + un 付き過去分詞】、[3] 【without + 名詞 + 過去分詞】の選択が、認知的事態把握および語用論的機能の差異に基づくことを明らかにすることを目的とする。分析には Langacker (2008) の認知文法および Verhagen (2005) の相互主観性理論を援用し、主としてコーパスに基づく実例を検討した。分析の結果は以下の通りである：[1]は動画的把握を反映し、命令文では「行動抑止」、叙実文では「予想外伝達」の機能を有する。[2]は静止画的把握を反映し、客観的・中立的表現として機能する。[3]は静止画的把握を反映し、命令文では「状態発生抑止」、叙実文では「予想外伝達」の機能を有する。これらの結果は、形態選択が認知的事態把握および語用論的機能の差異に依存することを示唆し、否定的付帯状況構文の理解に新たな視点を提供するものである。

参考文献：(1) Langacker, Ronald W. (2008) *Cognitive Grammar: A basic Introduction*. Oxford: Oxford University Press. (2) Verhagen, Arie (2005) *Constructions of Intersubjectivity: Discourse, Syntax, and Cognition*. Oxford: Oxford University Press.

□頭発表 (9:00~11:40)

会場：Room4 ()

4-司会：
司会補佐：

4-①9:00~9:35

語用論的解釈の自動生成とその課題：LLM を用いた相互行為分析の可能性

水島 梨紗 (札幌学院大学)・大澤 真也 (広島修道大学)・大木 七帆 (北海道武蔵女子短期大学)・

阪上 辰也 (広島修道大学)・田中 洋也 (北海学園大学)・中西 大輔 (広島修道大学)

本研究は、大規模言語モデル (LLM) を親子間の助言場面における交渉的対話の分析に応用することを試み、その語用論的分析能力の検証とその課題を検討したものである。近年、発話行為や談話機能の自動注釈に LLM を用いる研究 (Su & Ye, 2025 など) が進み、語用論研究の新たな支援手法として注目されている。本研究では、英語母語話者と高度な非母語話者による創作対話を対象に、多層的な分析枠組みを設定し、発話機能、相互行為の流れ、関係性の変化などを整理した。その結果、LLM は発話の連なりや関係性の動きとともに、対話全体の構造を的確に把握する傾向を示した。一方で、親子関係に関わるバイアスや分析根拠の不透明さ、過剰な推測といった課題も残された。今後は、LLM を「万能な分析者」ではなく、人間の専門知と協働して分析を支える存在として位置づけ、理論に基づくプロンプト設計と分析過程の可視化を通して、人と LLM が協働する語用論研究の新たな展開を目指す。

参考文献：Su, H. and Ye, J. 2025. “Large Language Models for Automating Fine-Grained Speech Act Annotation: A Critical Evaluation of GPT-4o and DeepSeek.” *Corpus Pragmatics*. Advance online publication. <https://doi.org/10.1007/s41701-025-00200-w>

4-②9:40~10:15

LLM の時空間メタファー認知

永井 宥之 (奈良先端科学技術大学院大学)

Large Language Model (LLM) がメタファーを認識・解釈する能力を持つことは既に報告されている (Wicke and Wachowiak 2024; Chen, Yang and Huang 2024). しかし、人間のように異なる概念間の繋がりを認識しているかは明らかではない。そこで、本研究では時空間メタファーを例に実験を行った。Boroditsky (2000) の心理実験に倣い、LLM にテキストおよび画像からなる「自己移動」「物体移動」の空間的刺激

を提示し、解釈が曖昧な構文 (e.g., “Next Wednesday’s meeting has moved forward two days. On what day will the meeting now take place?”) の解釈を求めた。gpt-4.1-mini, llama3.2-vision:11b, qwen2.5vl:7b の3モデルを用いた結果、いずれのモデル・条件でも刺激によるプライミング効果は認められず、人間にみられる時空間概念の連動は観察されなかった。本実験の結果は、概念メタファーの経験基盤説を傍証し、統計学習のみでは概念メタファーの獲得が困難であることを示唆する。

参考文献：(1) Wicke, P., & Wachowiak, L. 2024. Exploring Spatial Schema Intuitions in Large Language and Vision Models. In *Findings of the Association for Computational Linguistics ACL 2024*. 6102-6117. (2) Boroditsky, L. 2000. “Metaphoric Structuring: Understanding Time through Spatial Metaphors.” *Cognition* 75(1). 1-28.

4ー司会：
司会補佐：

4ー③10:25～11:00

『言語相対仮説の再検討：外国語効果に基づく検証と考察』

高木 杏実 (北星学園大学[院])

本研究は、外国語の使用が情動を抑制するとされる『外国語効果』の観点から、“言語が話者の世界観に影響を与える”とする言語相対仮説の再考を試みるものである。Costa et al, (2014) による先行研究を踏まえ本研究では、日本語母語話者を対象に、使用言語が合理・非合理的判断に及ぼす影響に関する検証実験を行った。課題はトロッコ問題に代表される倫理的ジレンマ問題を使用、回答形式は①合理・非合理の二択から判断を選ぶ選択形式と、②判断の選択後に理由記述を求める記述形式の二種類を用意した結果、①については使用言語による有意な差が認められた一方、②については有意差は認められなかったものの、判断対象への心的態度に、言語的特徴に起因すると思われる差異が見受けられた。言語と思考にまつわるこれら一連の現象に対し、多角的な知見に基づき考察を投じる。

参考文献：(1) Costa, A. et al. (2014). Your morals depend on language. *PLOS ONE* 9(4) e94842. (2) 西村義樹・長谷川明香 (2016) 「語彙、文法、好まれる言い回し—認知文法の視点—」藤田耕司, 西村義樹 編『文法と語彙への統合的アプローチ：生成文法・認知言語学と日本語学：日英対照』282-307. 開拓社, (3) 池上嘉彦 (1981) 「『する』と『なる』の言語学：言語と文化のタイポロジーへの試論」大修館書店, (4) 山本翔子・結城雅樹 (2019) 「トロッコ問題への反応の文化差はどこから来るのか？関係流動性と評判期待の役割に関する国際比較研究」社会心理学研究 35 (2) 61-71.

4ー④11:05～11:40

日本で働く中国人会社員の規範意識と人間関係 ―重負荷依頼に対する発話分析から―

四谷 晴子 (法政大学)

本研究は、日本企業で働く中国人会社員が、親しい日本人同僚からコンプライアンス違反に相当する「重負荷依頼」を受けた際に、日本人を相手とする日本語応答と、中国人を相手とする中国語応答を比較し、規範意識と対人調整のあり方を検討した。中国人会社員 30 名を対象に DCT 調査と意識調査を行い、発話を「主要部 (断り・理由・忠告)」と「周辺部 (感情表出・ヘッジ)」に分類した。分析の結果、日本人に対する応答では相手の理解や評価を想定した周辺部の使用が多く、同胞である中国人を相手に想定した中国語発話では、理由提示や忠告を中心とする率直な表現が見られた。これらの応答は、話者の個人的倫理観にとどまらず、相手との関係性や集団組織という「場」において相互に評価されるコミュニケーション実践として理解できる。

参考文献：(1) 岡智之ほか編 2022. 『場と言語・コミュニケーション』ひつじ書房. (2) Brown, P. & Levinson, S. C. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge Press. (3) Haugh, M. 2007. The discursive challenge to politeness research: An interactional alternative. *Journal of Politeness Research*, 3(2), 295-317.

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room1 ()

5-①②司会：

司会補佐：

5-①13:00~13:35

日本語における語用論的前提の戦略使用 ―セールスやセラピーを題材に

井上 大輔 (フリー)

本発表の目的は、日本語における語用論的前提の戦略的使用を分析することである。語用論的前提は会話の参加者が共通基盤に含まれているとみなしている背景情報のことである (Allott 2010, p 51)。そして、語用論的前提の戦略使用とは、会話を自分に有利に進めるために話者が語用論的前提を本来の用法とは異なる形で用いることを指す。Vallauri (2021) は英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語の広告文において、語用論的前提を含む文章が戦略的に用いられる様子を分析している。しかし、その中には日本語は含まれていない。また、セラピーやセールスのようにリアルタイムで誘導が行われる場面を分析してはいない。そのため、日本語におけるセラピーやセールスにおける語用論的前提の戦略的使用を分析することで、日本語における語用論的前提の戦略的使用の理解をさらに進める、これが本発表の目的である。

参考文献：(1) Allott, N. 2010. *Key Terms in Pragmatics*. London: Bloomsbury Publishing Plc. (岡田聡宏・井門亮・松崎由貴・小牧久典 (訳) 2015 『語用論キータム事典』東京：開拓社) (2) Vallauri, E. L. 2021. "Presupposition, attention and cognitive load." *Journal of Pragmatics* 183, 15-28.

5-②13:40~14:15

離陸前機内アナウンスのユーモアにみる詩的語用論とコミュニケーションの公共性

井出 里咲子 (筑波大学)

本発表では、米国サウスウエスト航空のある客室乗務員による軽妙でユーモア溢れる離陸前安全アナウンスをデータに、公共の場にユーモアをきっかけとした笑いが生じる仕組みを詩的語用論の観点から分析する。発表では文字化資料をもとに、次の二つを行う。まず、乗客の笑いを誘う逸脱的な発話がどのように遂行されるかを、言語形式とレトリックから整理する。次に、疑似的自己開示／からかい／嘲り発話が重層的に場を再コンテキスト化する様相を明らかにしつつ、それが話し手 (客室乗務員) と聞き手 (乗客) に対し交互に提示される過程から、その場に疑似的・儀礼的スタンスとしての対等性と庶民性が指標されることを考察する。総じてアメリカ社会の公的コミュニケーションの身構えにおいて、ユーモアとそれに共謀する集団的な笑いは、共有される文化的スクリプトと場の認識を指標し、公共空間を共振させ、共通基盤としての価値や情感を再生産することを論じる。

参考文献：(1) 井出里咲子 2014. 「スモールトークの公共性―アメリカ社会におけるおしゃべりとその詩的機能をめぐって」『現代語現代文化論業』12: 87-101. (2) 片岡邦好・武黒麻紀子・榎本剛士編 2022. 『ポエティクスの新展開―プルリモーダルな実践の詩的解釈に向けて』東京：ひつじ書房。

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room2 ()

6-①②司会：

司会補佐：

6-①13:00~13:35

話し手のフェイス意識から考える「マウンティング」

数納 風香 (北海道大学[院])

本発表は、「マウンティング」について、話し手のフェイス意識という観点から説明を試みるものである。「マウンティング」という語が、自慢や嫌味、皮肉といった既存語から独立して普及・一般化した事実は、既存語では捉えきれない相互行為上の特異性を示唆するものと考えられる。典型的な「マウンティング」は、一見ポライトな発話の形式をとりつつ、推意レベルで自己の優位性を示す点が特徴である。従来、聞き手の受け取り方に依存して説明されてきた「マウンティング」について、本研究は Brown and Levinson (1987) のポジティブ・フェイスの概念と Goffman (1967) の「品行」概念を参照し、話し手が表

面的には相手との円滑なコミュニケーションを志向する姿勢を保ったまま自身のフェイス高揚を試みる言動であると分析する。これにより、話し手自身のフェイス意識に焦点を当てた言語行動研究の新たな視点を提示する。

参考文献：(1) Brown, P. and S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge: Cambridge University Press. (2) Goffman, E. 1967. *Interaction Ritual: Essays on Face-to-Face Behaviour*. New York: Anchor Books.

6-②13:40~14:15

『世界一ブス!』と言われて：非命題的暴言におけるフェイス侵害と感情の構造

大塚 生子 (大阪工業大学)

本研究は、命題的意味が破綻した暴言がいかにフェイス侵害として機能するのかを明らかにし、イン／ポライトネス理論の再検討を試みる。分析対象は、筆者が路上で見知らぬ他者から「世界一ブス!」と罵倒された一件である。この発話は真偽判定が困難であり、発話者の意図的な評価を反映しないが、受け手には強い攻撃として知覚された。本発表では、このような暴言が①感情の即時的発露として意味を超えた身体的な威圧感を生むこと、②関係拒否として社会的契約を破ること、③公共空間における他者のまなざしを通じ羞恥と排除を生むことを示す。これらを踏まえ、フェイスを「関係的承認の期待」と再定義し、暴言の語用論的理解を深めることを試みる。

参考文献：(1) Culpeper, J. (2011). *Impoliteness: Using language to cause offence*. Cambridge University Press. (2) Culpeper, J. (2021). Impoliteness and hate speech: Compare and contrast. *Journal of Pragmatics*, 186, 99-113. (3) Goffman, E. (1967). *Interaction ritual: Essays on face-to-face behavior*. Anchor Books.

□頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room3 ()

7-①②司会：

司会補佐：

7-①13:00~13:35

The belief in shared context: a cognitive processing explanation for variation across languages

LONG, Christopher (Tohoku Gakuin University)

Register/dialect variation reveals how when degree of shared context increases, use of elaboration goes down (e.g., Biber & Finegan, 1994; Li, Dunn & Nini (2023)). The current study is a novel attempt at investigating this phenomenon cross-linguistically and tests whether languages with systems of social indexing (i.e., honorifics) rely less on elaboration. A sample of features (phonological, morphological, nominal, verbal) (N=344) in the World Atlas of Language Structures (WALS) was identified for 20 languages with varying degrees of honorifics and coded along an elaboration/reduction scale. Analyses revealed a negative correlation between use of elaboration and degree of social indexing and regression analyses selected honorifics as a significant predictor. These results demonstrate how cross-linguistic variation can be explained by cognitive processing efficiency. Specifically, it is hypothesized that because social indexing reinforces a belief in shared context, it allows for conservation of processing resources and results in a decrease in elaboration features.

References: (1) Biber, D. & Finegan, E. (Eds) (1994). *Sociolinguistic Perspectives on Register* (315-347). New York: Oxford UP. (2) Li, Dunn & Nini (2023). Register variation remains stable across 60 languages. *Corpus Linguistics and Linguistic Theory*, 19(3), 397-426.

口頭発表 (13:00~14:15)

会場：Room4 ()

8-①②司会：

司会補佐：

8-①13:00~13:35

否定のコピュラを用いたメタファー表現とその談話的機能

岡田 純音 (京都大学[院])

本発表は「子供じゃないんだから」のように比喩的に解釈される否定コピュラに着目し、日本語話し言葉における当該表現の構文の特性および談話的機能を明らかにする。はじめに否定コピュラの比喩的解釈のメカニズムについて、メンタルスペース理論を援用して記述する。次に、当該表現の事例を日本語日常会話コーパスから収集し、否定コピュラに理由/逆接が後続する表現（「X じゃないから」「X じゃないんだから」「X じゃないけど」）が比喩的に解釈されやすいことを定量的に示す。さらに、逆接の「じゃないけど」がヘッジやフレーミングという談話的機能を担うという岡本 (2020) の指摘をふまえ、否定コピュラに理由が後続する形式でも同様の機能が確認されること、共話的な用法では言いさしのカラの「聞き手の認識上の問題を是正する」という機能が現れやすいことを示す。

参考文献：岡本雅史. 2020. 「直喩標識としての「じゃないけど」—談話における直喩とアナロジーの再考に向けて—」、『日本認知言語学会論文集』20、126-137.

8-②13:40~14:15

中国語大規模コーパスに基づくコロナメタファーの使用と現実状況変化との関係性分析

轟 雨農 (北海道大学[院])

本研究では、2020 年 1 月~2022 年 12 月までに「中国新聞網」サイトでタイトルに「新冠」を含む全記事 (41,953 本、約 2,330 万字) を収集し、「1 日 2 本」のサンプルに MIP を適用してコロナメタファーリストを作成した。その上で、全記事を文単位で自動ラベリングし、各月の出現回数及び百万字あたりの頻度を算出した。感染者数・記事数・バイドゥ指数をそれぞれパンデミック深刻度・メディア関心度・一般市民関心度の指標とし、スピアマン順位相関・相互相関・OLS 回帰・Granger 因果性検定により関係性を分析した。その結果、出現回数と頻度はいずれもメディア関心度と安定的な連動を示し、その連動は数か月先まで持続した。感染者数とは負の関連性を示したものの、因果的關係は確認されず、「感染拡大に伴い戦争メタファーが多用される」という一般的な直感も支持されない。一般市民関心度との関連性も弱かった。以上により、コロナメタファーの語用分析に実証的基盤を提供した。

参考文献：(1) Charteris Black, J. 2021. *Metaphors of Coronavirus: Invisible Enemy or Zombie Apocalypse*. Cham: Palgrave Macmillan. (2) Pragglejaz Group. 2007. “MIP: A Method for Identifying Metaphorically Used Words in Discourse.” *Metaphor and Symbol*, 22(1), 1-39.

【シンポジウム (Symposium)】 (14:30~17:00)

<オンラインによる同時配信有>

会場：Room1 ()

混沌としたデータのなかに意味を見出す

司会：小松原 哲太 (神戸大学)

1. 趣旨

一見すると複雑で手に負えないと思えるような言語現象を丹念に精査し、そのなかに秩序やパターンを見出すことは、語用論という分野の際立った特徴である。本シンポジウムではこの複雑さに果敢に立ち向かい、無秩序にみえるようなデータから秩序を見つけ出す独自の研究手法を開拓してきた研究者 3 名を迎え、混沌としたデータを意味づける語用論のアプローチを論じる。

2. 登壇者紹介

崎田 智子（同志社大学教授）：談話と認知の接点を中心に、対話統語論・認知言語学・スタンス理論を統合した認知語用論で伝達と語りを研究。最近では史実伝承における発話構築や談話展開を分析。また、談話標識のジャンル間比較に取り組んでいる。

＜主要業績＞2002. *Reporting Discourse, Tense, and Cognition*. Elsevier. / 2013. “Discourse markers as stance markers: *Well* in stance alignment in conversational interaction.” *Pragmatics & Cognition* 21(1). / 2017. “Stance management in oral narrative: The role of discourse marker *well* and resonance.” *Functions of Language* 24(1).

高木 智世（筑波大学教授）：日常会話をはじめ、幼児と養育者の相互行為、自閉症のある参加者を含む相互行為などをフィールドに、近年は非流暢性や間主観性確立に関わる現象の会話分析的研究に取り組んでいる。共著書に『会話分析の基礎』など。

＜主要業績＞2024. “Differentiated use of Japanese interjective items *eeto*, *sonoo* and *anoo* in self-initiated, same-turn repair”, *East Asian Pragmatics* (Emi Morita と共著) ; 2021. “Requesting an account for the unaccountable: The primordial nature of [NP+wa?]-format turns used by young Japanese children”, *Journal of Pragmatics* 178.

細馬 宏通（早稲田大学教授、滋賀県立大学名誉教授）：相互行為研究、視聴覚メディア研究。最近では特に訪問介護における利用者とヘルパーの相互行為研究に取り組んでいる。著書に『マンガはうたう』『フキダシ論』（青土社）、『介護するからだ』（医学書院）など。

＜主要業績＞2022. 「ママ、この人の名前は？—ニュース番組のオンライン・インタビューにおける大人と子どもの相互行為—」 *社会言語科学* 25(1); 2022. 『ELAN 入門：言語学・行動学からメディア研究まで』 ひつじ書房 (菊地浩平と共編著); 2014. 「相互行為としてのページめくり」 *認知科学* 21(1)

3. 発表内容（話題）

第1発表

語りの多層性とカオスの秩序—史実伝承における対話性と認知—

崎田 智子（同志社大学）

フィールドワークデータでは、仮説を立てても次々に例外が現れる。従来の言語学が、言語運用の問題、相互行為や文脈依存の語用論的現象、誤用などと位置づけてきたカオスの現象の一例として、本発表では史実伝承の語りを取り上げる。直接経験の伝達とは異なり、第一世代の体験を第二世代話者が擬似体験記憶として回想し、第三世代に伝える過程では、時間的隔たりの中で記憶が変容し、感情や評価、再解釈や誇張を含み、言い淀みや繰り返し等を伴う。この一見混沌としたデータを、対話性・響鳴・スタンス・共感性・認知モード・主観性と間主観性といった観点から分析し、ダイアグラフを用いてシンタグマティック／パラディグマティックに織りなされる語りの多層性を明らかにすることで、カオスの言語現象の本質を探る。語り手が対話性に基づいて言語資源を駆使し、異なる認知モードによってシステムティックに語り空間を構築し、聞き手と共有していることを示す。

第2発表

日常会話の中の「混沌」に見る秩序—日本語言い淀み形式の相互行為的分業体系—

高木 智世（筑波大学）

日常会話における言い淀み形式（「あの(一)」「その(一)」「ええと」など）の使用は、従来、認知的負荷の現れや会話の「乱れ」として扱われることが多かった。一見混沌として見えるこうした「言い淀み」現象を会話分析的に詳細に観察すると、そこで用いられる言い淀み形式が相互行為状況に応じて使い分けられていることがわかる。例えば、「あの(一)」はターンや連鎖の軌道の変更・更新を、「その(一)」は共有知識への紐付けを、「ええと」は求められているタスクの達成への志向を示す。本発表では、「あの(一)」「その(一)」「ええと」「まあ」「なんか」のそれぞれが、相互行為の中で繰り返し発生する多様なレベルの相互行為的課題に随時対処することを可能にする資源であることを示す。さらに、これらの日本語の主要な言い淀み形式が、それぞれ固有の相互行為的働きを担いつつ相補的に協働する「分業体系」を成していることを明らかにする。

第3発表

訪問介護における共同調理—混沌とした台所で共同注意を達成する方法—

細馬 宏通 (早稲田大学)

訪問介護は、多様な環境で介護を行う点で、さまざまな介護サービスの中でも特異な存在である。認知症高齢者との共同調理を行う場合、ヘルパーはコンロの数も流しの大きさも冷蔵庫の構造も、そしてそれらの配置も全く異なる各家庭を訪れ、そこで利用者と共同作業を行う必要がある。一方、認知症高齢者は注意機能に問題を抱えており、さまざまな注意対象が散在する台所で、適切な食材に注意を向け、共同調理を行うのは簡単ではない。では、ヘルパーはどのように利用者の注意を喚起し、どのようにお互いの注意対象を共有し、共同注意を達成するのだろうか。この発表では、特に共同調理の過程で冷蔵庫の中身をお互いに確認しあう場面に注目し、利用者とヘルパーの発話、視線、身体動作をコーディングし、両者がどのように間身体的に協調して、マルチモーダルに共同注意を達成するかを明らかにする。